

# 連載 新屋のアスリートたち (10)

## 全県少年野球で高等科も尋常科も初制覇した日新チーム

かつて新屋は『少年野球』と聞けば、仕事そっちのけで町を挙げて応援に駆け付けた「野球の町」として有名であった。その礎になった一因を紹介したい。

第1回全県少年野球が開催されたのは大正10年。最初は小学校・高等科の大会であったが、尋常科の大会は第4回大会から始まった。高等科の大会が現在の少年野球に受け継がれている。

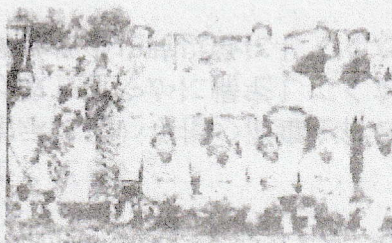
日新小学校は同12年の第3回大会から参加。大門昌太郎（愛宕町）と大塚豊三郎（緑町）のバッテリーで勝ち進み、3回戦は優勝候補・神宮寺に5対4で勝利。準決勝で優勝した能代に3対4で惜敗したが日新ナインは大いに自信を持った。

翌大正13年には、海に近い清水出脇の地に、応援歌に登場する「西山原頭（グラウンド）」ができ、練習に一段と熱が入った。

大正15年は「新屋厄年祓年祝祭」が始まった年であるが、夏は少年野球で沸きに沸いた年でもある。

A組（高等科）が、広面、土崎、本莊を撃破して初の決勝に進み、相手は強豪・中通。日新は2回に押し出しで1点先取。この点差を守り切り

7対6で初優勝を飾った。



4番打者の大島勘九郎（関町）が3割4分の高打率で3番の斉藤庄次郎とともに打撃賞に輝いた。6番に渡辺勇之助（下表町・渡勇）の名も見える。

メンバー	
治一郎	助史蔵
浦木三郎	豊善又
三塚藤	塚崎川
二遊投	捕左中

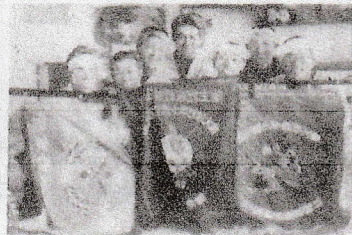
B組（尋常科）

も旭北や大館を破って初の決勝進出。常勝だった神宮寺を3対0で完封勝利。大会史上初のアベック優勝を遂げた。後に甲子園に4年連続出場し、「戦前秋田の三大投手」と言われる梅崎（関町）が5年生ながら5番に名を連ねている。



メンバー	
治春司	治昇一郎
民弥博	富正清
川浦大	梅崎佐
三遊捕	投左一二

これまでの神宮寺と中通の時代を終わらせ、新たに「日新黄金時代」の幕開けを告げる快挙であった。因みに、尋常科はこの年から4年連続優勝し、3年連続した年に永久優勝旗を授与された。コーチ陣が大喜びで撮った写真が残っている。



この優勝旗は、昭和31年の日新中学校の火事で焼失してしまつた。少年野球史上唯一の貴重な永久優勝旗である。尋常科の優勝旗をなぜ中学校に保管していたのか、残念でならない。

一方、同4年間の高等科は優勝、準優勝、準優勝、優勝と続き、全県少年野球の決勝はA組もB組も4年連続日新が出ていたのだから「日新の野球／野球の新屋」として否が応でも全県に鳴り響いたのであった。

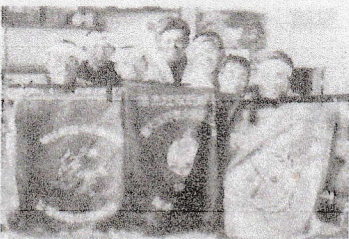
「刃向こう者は蹂躪せん：常勝の軍日新の：新屋魂伊達じゃない！」という応援歌が生まれたのも頷ける。

この強さの秘密の一つは三浦捷治や平川民治という稀代のコーチの存在が大きかった。二人によって作られたという応援歌「時乾坤にめぐりきて雄物川原の深緑：」は正に新屋の野球の象徴であった。

もう一つは、西山グラウンドでの猛練習にあった。一例を挙げれば、個人ノックで一人の選手に二人がかかりでノックするという激しいものだった。さらに全練習終了後「ノーエラー」タイムと称して、全員がノックを受け、一人でもエラーすると全員やり直しとなり、全員ノーエラーになるまで、何回でも、暗くなつてもやり続けたという。

だから守備は当時の野球評論家から「鉄桶」と称えられた。汗と涙で疲れ切った選手たちが、暗くなつたアカシヤの小道を最後の力を振り絞つて声高らかに「：森のアカシヤ暮るる頃：」と歌つて帰る姿に町民は元気をもらつていた。

とここで、前述の永久優勝旗の写真は文字が全て裏文字になつている。焼き付ける時に後前にしたのではないかとこの説もある。裏返しにしたものも掲載してみました。



写真の諸氏は全員鬼籍入りしており、正解を聞くことはできません。皆さんはどちらが本当だと思いますか？（のばこやま）

B組（尋常科）決勝	
神宮寺	0 0 0 0 0 0 0
日新	0 2 0 1 0 0 X 3

A組（高等科）決勝	
日新	0 1 3 2 0 0 1 7
中通	0 0 4 1 0 0 1 6